

私には少しだけ靈感がある。初めて訪れた場所ですごい寒を感じたり、誰もいない場所で視線を感じたり、それにそういう時に黒いもやのようなものが見えた事が何度かあった。

けれどその程度の靈感だった。ハッキリ見えたりとか声が聞こえたりだとか、そういう事は全然なく当然黒いもやが見えても何ができるという訳でもなかった。

私にできるのはただ、もし見えてしまっても見えないふり、気付かないふりをして通り過ぎるだけだった。

幽霊は自分を認識した人に憑いていたり、もしくは連れていこうとしたりするらしい。テレビで有名な霊能者が話していたそれを聞いた私は、幽霊に気付いても絶対に気付かないふりをしようと決めていた。

（え……、あ、あれって……）

視線の先には二人の男性がいた。信号機の側に立ち、道路を渡ろうとする様子もなく二人でただ通行人をぼんやりと眺めているのが見える。

二人ともかなり目を引くイケメンだった。整った顔立ちで背が高くスマートなスタイルで、女性ならチラッとでも目を向けていそうなイケメン二人組に、けれど誰一人として彼等に目を向けず認識すらしていない様子で通り過ぎていった。

その中の一人の通行人が、男性の肩に当たりそうにな

る。お互い避けようとする素振りも見せずに、なのに肩がぶつかる事なく通行人は歩き去っていった。

男性の体を通り抜けるように――それを見て私はやっぱりあの二人は生きてる人間ではないのだと理解した。

（嘘……こんなにハッキリ見えるなんて……）

幽霊を、こんなにハッキリと見たのは初めてだった。血を流してるとか欠損があるとかでもなく、二人は一見すると生きてる人間と全く変わりないように見えた。けどその体をよくよく見てみると、幽霊らしくほんの少し透けているのが分かる。

それでもあまりにも幽霊っぽくない二人組に恐怖も感じず見つめていると、不意に一人が私の方に顔を向けてきた。

その瞬間パッと顔を背ける。

（あ……っ、ど、どうしよ……つい、じっと見ちゃった……っ）

幽霊の方に見えていると気付かれてはいけないのに、それを忘れてついまじまじと見てしまっていた。

（だ、大丈夫だよ、すぐに顔逸らしたし……気付かれてはいない筈……）

そう思いながらも足早にこの場を離れる。

少し遠回りになるけど彼等のいる道は避けて行こうと、私は当初の予定通り一人で映画館へと向かった。

この時彼等が私の背中を見ていた事になど、私は全く気付いていなかった。

『なあ、見えてるんだろ、俺達のこと。……なあおい、無視すんなって』

『さっき目が合いそうだったよね？ 急いで逸らしてたけど。あれって俺達が見えてたって事だよね？』

クニ♡クニ♡クニ♡クニ♡クニ♡クニ♡クニ♡クニ♡  
ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり……♡♡♡

「ふう……ふう……ふう……ふう……っ……♡♡ ふ…  
っ、ふうう……………っ♡♡」

映画館に到着し、予約していた席に座って、しばらくして館内が暗くなりスクリーンに映像が流れ始めるとーいつの間にか誰もいなかった筈の両隣に二人の男性が座っていた。

さっき見た二人組の幽霊だった。

その幽霊が私に話しかけながら手を伸ばし、それぞれが私の胸の先を弄っている。

ハッキリと見えるその姿や指の感触に、私は今二人の幽霊に痴漢されているのだとー現実を受け入れるしかなかった。

(し……っ、信じられない……っ♡ ゆッ、幽霊に……  
ちかん……ッ、されるなんて……ッ♡♡)

声がハッキリ聞こえてる事や触られてる事にも驚きだけ  
ど、幽霊にいやらしい事をされているという事実が何よ  
りも信じられなかった。

(ち……っ♡乳首……いじられてるゝ……♡ ブラジャー  
……してるのに……っ♡ ちょ、直接……さわられてる  
みたい……♡♡)

『てか触れるってスゲェな。俺今めっちゃ乳首摘んでる  
わ』

『俺も。今こっちの乳首ぐりぐりしてる。ブラジャーあ  
るのになんか直接触れてるね』

「ッッ……♡んうう……っ♡ ふう……ふう……ふう  
……ふう……ふう……♡♡」

二人は感動したように言いながら私の乳首を好きに弄っ  
た。

どうやら幽霊の二人にも私の乳首を直に弄っている感覚  
があるらしい。ぐにぐに♡コリコリ♡と弄っている乳首  
の感触が、二人にも感じられているのかと思うと余計に  
恥ずかしさが増した。

『おい、いいのか？ このまま知らないふりふるならお  
前の乳首もっと虐めてやるぞ？』

「ッッ……！♡ ふっ……、ふう…♡ ふう…♡ ふうゝ

…………♡♡」

右側に座る精悍に整った顔のイケメン幽霊が、そう言って乳首をグニ♡グニ♡摘んできた。私をどうにか反応させようとしているのか、いやらしい事を言いながら指を容赦なく動かしてくる。

それでも私は彼等を認識している事に気付かれてはいけなないと、気付かれたらもっと大変な事になると、そう思って必死に顔をスクリーンに向けて知らないふりをした。

『乳首こんなに勃起させてるのに、気付いてないって言うには無理があるよね。ほら、こんなにぷっくり腫れちゃってるんだよ？』

『ッッ……♡♡ んふ……ッ♡ ふう……♡ふう……♡ふう……♡』

左側に座る華やかに整った顔のイケメン幽霊が、ブラジャーなんて無いものであるかのように指先でコリ♡コリ♡乳首を撫で回した。

ブラジャーの中で私の乳首は完全に硬くなってしまっていて、それでも、私は知らないふりをして男女の映像が流れるスクリーンから目を逸らさずに見続けた。

『強情だな……じゃあどれだけその我慢が続くか確かめてやるよ』

そんな言葉が右側から聞こえたかと思うと、突然、私の右の耳にクチュ…♡と舌が這う感覚が走った。

「ッッ……！？♡♡」

(み、耳……ッ、舐められて…………ッッ！♡♡)

そしてそれは右側だけにとどまらなかった。左側の耳もクチュリ♡と舌の感触が走る。

手の感触だけでなく舌の感触までハッキリと、まるで生きてる人のそのように感じられてゾクゾク……ッ♡と頂が粟立った。

くちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくち  
ゆ……♡♡♡ ヌチュリ、ヌチュッ、ヌチュッ、ヌチュ  
ヌチュヌチュヌチュ♡♡♡

「ンフ…………ッッ♡♡ ふう…っ、ふう…っ、ふう…  
っ、ふう…っ、ッッ……♡♡」

左右から挟み込むように耳を舐められる。そして乳首を弄る動きも止まらず四ヶ所を同時に責められた。

右からは耳全体をしゃぶるように舐められながら乳首をむにむにと摘まれ、左からは唾液に濡らした舌を穴に押し込まれながら乳首をコリコリ捏ねられる。

左右から同時にいやらしい水音が聞こえ、にゆるにゆるとした舌の感触に責められながら、乳首をそれぞれ好き勝手に鬦られる。

『乳首めっちゃいやしくなってるよ。すげえコリコリしてる。幽霊にエッチな事されて感じてるんだ』

『もっと弄ってほしいのか？ 俺達に触られたくてワザ

と無視してるんだろ？　じゃなきゃここまで無視できないよな。幽霊にこんな事されて悦ぶなんて変態だな』

「ンふうううゝ……♡♡　ふ……っ、ふ……っ、ンンン……ッ♡♡」

その上二人は言葉でも私を責め立てた。いやらしい言葉を左右から聞かせて私を一層辱める。

クチュクチュと耳の穴を舐められながらそれぞれにいやらしい事を言われて、乳首を弄られる。好き勝手な言葉にも私はひたすら我慢した。

（ち……ッ♡ちがうのに……ッ♡わたし……こんなことホントはいやなのにな……ッ♡♡）

心の中で反論しつつ視線はずっとスクリーンに向ける。きっと第三者の目には私はただ一人で映画を見ている、どこにでもいる普通の観客としか映らないのだろう。けれど実際は、二人の幽霊に左右から挟まれ逃げる事もできず痴漢されている状態だった。

でも、そんな事言っても誰も信じないだろう。だから私は他の観客にも気付かれないようにひたすら幽霊達のいやらしい責めに静かに耐えるしかなかった。

『ああヤバいな、すげえ興奮する……死んでからこんな興奮するのは初めてだわ』

『ホントに、乳首弄ってるだけなのにスゲー興奮すんね。しかもこんな堂々と痴漢できるとか幽霊もなかなか悪くないね』

クチュクチュ耳をしゃぶり、ぐにぐに乳首を捏ねながら二人はまた勝手な事を言った。

私以外誰にも聞こえないからと声を抑える事もせず、耳元でいやらしい事を言ってくる。

二人の、何故か熱を感じる荒い息まで耳にかかって、頭の奥がジンジン熱くなった。

(もう……、いい加減おわって……♡♡ はやく……どっかいって……っ♡♡)

そう私が思っていると、その願いが通じたのか二人が離れていった。

『なかなか我慢強いな。乳首こんなパンパンに腫らしているのに……………ホントに気付いてないのか?』

右側の幽霊がそんな事を言って、私はその言葉に心の中で何度も頷く。その顔がニヤニヤ笑っている事など気付かず、スクリーンを見つめたままようやく解放されるのだと喜ぶ。

『じゃあ、流石に服を脱がせたら気付くんじゃない?』

けれど次に聞こえた言葉に『え……?』と心の中で首を傾げた。

直後に、着ていたシャツがスルスルスル……と捲られる。

『おおすげえ、服も触れるのかよ』『ヤバい、マジでできたw』――左側の幽霊の手が、私のシャツを捲る様子が

視界の端に映った。

(ッッ……！♡ う……うそ……ッッ♡服まで脱がせられるなんて……っっ♡♡ どッ、どうしよ……こ、このままじゃ………っっ♡♡)

私がそう焦っている間も幽霊達は待ってはくれず『じゃあブラは俺が外してやる』と、勝手に私のブラジャーを外した。

「~~~~~ッッ！♡♡」

映画館という公共の場で、私の胸が露わにされる。

首元まで捲られた服の下で、私の胸が思いっきり顔を出していた。

『なんだ、あんな知らん顔しといて乳首思っきし勃ってんじゃねえか。ココこんなにしといてよく無視できたな？』

右側の幽霊が露わになった乳首をぶるぶる揺さぶりながらそう言う。

『あ～あ、エッチな勃起乳首完全に見えちゃってるよ。どうする？ まだ俺達の事知らないふりする？』

左側の幽霊も、乳首をちょんちょん突つきながら言ってきた。

私なそんな彼等の言動に全身が茹だったように熱くなった。

(~~~~~ッッ♡♡ ど…、どうしよお……ッ

♡こんなことまでされるなんて……っ♡♡ ま、まだ……見えないふり……続けるべき……………??♡♡) もう私が見える事を気付かれてもいいから抵抗するべきか、それとも見えないふりを続けるべきか頭が混乱して分からなかった。

そんな私に対して二人ともやっぱり待ってはくれず、さっさと次の行動へと移ってしまう。

『おっぱい丸出しになってもまだ演技続けるのか。大したもんだな』

『まあいっそずっとそうしといてくれた方がコッチもやりやすいかもね』

と、そう言って、左右から私の乳首にしゃぶりついてきた。

ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく♡  
♡♡ ぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅる♡♡♡

「~~~~~ッッ!!♡♡ ふう♡ふう♡ふう♡ふう♡ふう♡ふう♡ふう♡ふう♡ っっう……♡♡」

映画館の中で私の乳首が、堂々と幽霊達にしゃぶられる。

幽霊達の口の中の感触がしっかりと乳首から伝わってきた。

熱くて、唾液でいっぱい濡れていて、舌はにやるにやるとしていて……そんな生きてる人間と全く変わらない

感触が、左右の乳首に同時に襲いかかってくる。

(ッ……、こ、こんなッ……ッ♡♡こんなことまで……  
されるなんて……ッ♡♡)

普通の痴漢でもされないような事を、実体の無い筈の幽霊にされている現実に一層頭が混乱した。

周囲からは私の姿はきっと、映画館で堂々と胸を出している痴女にしか見えないのだろう。男の幽霊二人が私の乳首をしゃぶっている姿なんて見えず、恥ずかしい格好をしている私の姿しか周囲の目には映らないのだ。

(ああッ……♡っ……わ、わたし……いったいどうしたら……ッ♡♡)

私の乳首をしゃぶる幽霊達は見ないようにして、スクリーンを見続けながら激しく困惑する。肘掛けに置いた両手を無意識にギュッと握り乳首から伝わる快感に耐える。

右の乳首をちゅるちゅる♡と吸われながら、左の乳首をにちゅにちゅ♡と舌で舐られる感覚が私を襲っていた。  
「ふうッ…♡ふうッ…♡ふうッ…♡ふうッ…♡ふうッ…♡  
んッふ……ッ♡♡ はあ…♡はあ…♡っんッんううう  
う……ッ♡♡」

(こ……こえ……我慢しないと……っ♡♡ わたしが……感じてるって、気づかれたらッ……♡♡)

もっといやらしい事をされてしまうと、必死で声を堪える。

けれど私の努力もむなしく幽霊達は更にいやらしい事を

してきた。

「ンンンン……！！♡♡」

ニチュ……♡♡と、私の脚を開いておまんこを撫でてきた。

『ハハ、まんこもうぐちゃぐちゃだな』

「フゥ♡ フゥ♡ フゥ♡ フゥ♡ フゥ♡ フゥ♡  
ッッ……♡♡」

右側の幽霊にストラックス越しにおまんこに指を押し込まれる。直接触れるだろうにワザとなのか、ストラックスの上から弄られている感覚に、まるで生きてる人間に触られているような気にさせられた。

『コッチはどんな感じかな〜』

「ふぐうううう……っ♡♡」

一方左側の幽霊は、ストラックス越しではなくもっと薄い、下着の上からクリトリスをカリカリ引っ搔いてきた。

ストラックス越しにおまんこの割れ目をニチュ♡ニチュ♡擦られながら、下着越しにクリトリスをカリカリ♡♡引っ搔かれる。

「はぁ♡ はぁ♡ はぁ♡ はぁ♡ はぁ♡ はぁ♡  
はぁ♡ はぁ♡ はぁ♡」

それと一緒に、また左右から乳首をしゃぶられて、たまらない快感が全身を駆け巡った。